

贈ることば、御礼のことば ——平田渡先生のご退職に寄せて

鼓 宗

平田渡先生の研究室に初めてうかがったのは、もう20年ほど前のことになる。千里山キャンパスにある先生のお部屋は、現在も残る法文研究室棟と、今は取り壊されてあすかの庭になっているが、文学部の事務室があった棟とを結んでいた渡り廊下に面する一室だった。後からうかがったところでは、もともと共同研究室か何かであった広い部屋を二室に割ったそうで、それでもなお広い部屋を占めるたくさんの書棚——記憶では、方形の部屋をぐるりと囲んだ上で、これもほとんど本で隠れてしまっている窓の側の壁から室内に突き出すかたちで置かれた棚が、衝立のように机の前を塞いでいた——と、その一段を前後二列に使うかたちで並べられた、あるいは天板にまで横にして積まれた本の山に驚いた、というよりはただただ圧倒されたのをおぼえている。若い頃に研究された十九世紀スペインの文豪、ベニート・ペレス・ガルドスの原書や研究書もあれば、そこには少なからぬ初版本や福田定一名義の貴重な処女作が見つかる、愛読なさっていた司馬遼太郎の著作の数々もあった。

むろんのこと、ラテンアメリカ小説の原典の多様な版——すでに『この世の王国』の翻訳を出され、後に『エクエ・ヤンバ・オー』に取り組みれることになるのだが、その地域の小説の世界的なブームの火付け役となった一人であるキューバのアレーホ・カルベンティエルをはじめ、ノーベル文学賞を受けたガブリエル・ガルシア＝マルケスやオクタビオ・パスら、長年にわたって平田先生が日本への紹介に努められた作家たちの作品——が書架の大きな部分を占めていたが、同様に目を引いたのは、いくつもの美しい全集を含む、現代や古典の日本文学の諸作品であった。後年、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ大学の哲学部に呼ばれて、ラモン・バリエエ＝イン克蘭も学んだ中世から続く伝統の学舎で、光源氏についての講演をなさることになるのだが、それもこのような幅広い教養を普段に身につけていらした先生にすれば、ごく自然ななりゆきであったのかもしれない。

ひたすら「食欲に」本を集め続ける平田先生が、その行方となるととたんに気前がよくなれるのが、貧乏性の筆者にはもったいなくすら感じられるほどで、自身のことだけでも記せば、チリの詩人ビセンテ・ウイドプロがスペインの著名な古典を下敷きに出した小説『わがシド』のサンティアゴ・デ・チレにおける初版や、アリアンサの2巻組の『スペイン・ラテンアメリカ文学事典』などをいただいた。どちらも貴重、かつ有用な書物で、先生には今なお感謝の念を抱いている。

もっともそのように蔵書を後進の研究者たちに惜しげもなくお配りになられながらも、平田先生の書棚の本はあふれる一方で、ちょうどこれはご自宅から六甲山系とともに望める瀬戸内の海で釣られたクロメバルやイシダイを、アオリイカやマダコを、奥様——ご達筆で、先生が理事を務められていた時期に本学でイスパニヤ学会が開かれた際には、大会の題字を揮毫された——とでは召し上がりきれずに、周りに嬉しいお裾分けをしてくださっていたのと同じことなのかもしれない。平田先生と、早朝から愛車の四駆を駆って枚方からお越しになる西川和男先生がいくら船が大きく揺れてもまったく酔わないのに対して、連れて行っていただくその都度、船べりの席ではなく船室の長椅子を温めることになってしまったために、もう長年ご一緒させていただいていないのだが、就職と結婚の祝いにと以前に贈ってくださった釣り竿と包丁は、リールを錆びつかせてしまった竿はともかく、切れ味を失わない銘入りの柳葉が、太刀魚やマアジなど、シーズンごとに送ってくださる海の幸たちを相手につたない腕でそれなりの見栄えのする造りをこしらえるのに役立ってくれている。

平田渡先生は長年にわたって、東西学術研究所の研究班で、主幹の和田葉子先生とともに活躍されてきた。サンティアゴ・デ・コンポステラへの招聘講演の折にわたしたちを恩師バリーニャス先生とともにあたたかく迎えてくださったマルセリーノ・アヒース先生——平成27年度には平田先生のお世話で外国語学部の招聘研究員として来日された——の『聖なるものをめぐる哲学』の邦訳は、気鋭の哲学者によるミルチャ・エリアーデ論として新聞の書評欄などでも注目を集めたが、そのお仕事のなかでは、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの紹介が何よりも重要な位置を占めている。

政治的な偏見と悪意から時には文学史から抹消されるほどに毀誉褒貶が激しかったが、ゴメス・デ・ラ・セルナは20世紀前半のスペイン文学の発展を語る際に欠かすことのできない偉大な作家である。マドリードはプエルタ・デル・ソル広場の南の鄙びたカフェ、ポンボに構えた、スペイン語でテルトゥリアと呼ばれる彼のサロンには、土曜日の夜になると、ファン・ラモン・ヒメネス、オルテガ・イ・ガセー、アソリンら錚々たる面々にはじまって、まだ駆け出しの作家たちにいたるまで、当地のありとあらゆる知識人たちが出入りした。ケバードやゴヤといった人々の評伝を書きスペイン芸術の伝統に敬意を表する一方で、常識にとらわれず既成の価値を転覆することにも傾注し、たとえば、主宰する雑誌「プロメテオ（プロメテウス）」にイタリアの「未来主義宣言」をいち早く載せたり、諸芸術の流派を独特の視点で解説した『イスモス（イズム）』を出したりと、ヨーロッパで勃興しつつあった前衛芸術を他に先駆けて紹介した。そのような〈新しい芸術〉を擁護する態度は、通人には姓ではなくラモンと親しみを込めて呼ばれるこの作家に、フランスで言えばアポリネールに比肩するような役割を担わせたのである。

作家としてのゴメス・デ・ラ・セルナは、あらゆる事象を題材にきわめて晦渋な文体で膨大な著作を残した。そのなかで文学史に燦然と残るのは、〈隠喩〉＋〈ユーモア〉と定義される〈グレグリーア〉である。日課のように創り溜められた、膨大で気が遠くなるほどの数のこの警

句的な短文のなかから、平田先生はわれわれにも親しみやすいものを厳選し、『グレゲリーア抄』としてまとめられた。それに先立っては、女体の特定の部位——やはり先生の訳書フェデリコ・アンダーシ『解剖学者』で、十五世紀末にイタリアの医師マテオ・コロボが探求したのはまた異なる場所だが——にこだわったグレゲリーアを集めた同じ作者の『乳房抄』も手がけられたが、堀口大學が40年近く前に『乳房新抄』の題で出したものの五倍を超える数の掌編を訳出されている。最近の『サーカス——えも言われぬ美しさの、きらびやかにして、永遠なる』と併せて、この特異な作家の作品が、先生の艶っぽい絶妙な日本語で読めることになったのは、わたしたちにとってまことにありがたいことである。今後も翻訳のお仕事を続ける意欲は満々であるとうかがっている。ここ数作は装丁も自ら手掛けられてきた平田先生の次の御訳書を楽しみに待ちたい。

教えていただく様々な健康法、好きな絵画や写真に映画の話題、30年にわたって顧問を務められたスペイン語研究部、複数の後進を育てられた大学院でのご指導、為春会のためにご用意くださるおいしいワイン……、思い出は尽きないけれども、最後に最近のご身の出来事に触れると、先取の精神を愛される平田先生は長年、フォーミュラーワンの世界に日本のコンストラクターとして真っ先に飛び込み、1970年代には最初にアメリカ合衆国の厳しい排ガス規制をクリアしたメーカーの自動車を乗り継がれてきたが、先ごろ、運転の安全を何よりも重視されて、中南米で人に火を与えたとされる神聖な獣をエンブレムとするイギリスの名門や、お若いころにセビーリャに留学される途中、シベリア鉄道とヒッチハイクでたどり着かれた北欧のブランドなどと迷われたすえに、三極の星をグリルにあしらったドイツの名車を選ばれた。滅多に見かけない美しいブルーの車体で、奥様を、ご息やお嬢様を、可愛いお孫さんをお連れして、きっと全国の名所名跡へとお出かけになられるのだろう。ワゴンのハッチを開けて釣り竿やクーラーボックスを積み込み、明石海峡大橋を渡って淡路島を目指すお姿も目に浮かんでくる。

今回は誌面の関係でそのすべてがかなわなかったけれども、多くの方々が贈る言葉を寄せたいと望まれたのも、九州ご出身の平田渡先生の温かいお人柄ゆえだろう。総合研究室棟の先生の研究室で開かれていた〈テルトゥリア〉、「ピラータス・セトウチアーノス」もいったん幕を閉じるのだろうが、ご退職後も先生を慕う多くの人々が集い、どこかで海賊の宴を催すに違いない。今年度は、平田渡先生と、互いエールを送り合われるという福井七子先生がともにご退職されることとなっており、とてもさみしい。が、平田先生はきっと素振りにも出さず、またどこかでいっしょに会えばいいだけじゃないか、と陽気に笑ってくださるはずだ。

平田渡先生、まことにありがとうございました。